

A & N ③ 「無意味な伝言」

1

鳩村和音は明瀬匠悟が電話に出ることを予想していたのだが、聞こえてきた声は明らかに別人のものであった。「はい、もしもし、明瀬探偵事務所です」

「ああ、永緑さんね。久しぶり、鳩村よ」

「お久しぶりです。今日もご依頼ですか？」

「ええ、実は、また殺人事件に巻き込まれたの」

鳩村がそう答えると、永緑涼は感情を押し殺した声で、

「……どういう事件です？」

と訊いてきた。永緑は重度のミス터리マニアであり、密室や首斬りなどの言葉に異常に反応する悪癖があるという。おそらく、殺人事件と聞いて今にも暴れだしそうな心の中の探偵小説狂を、ぐっと抑えつけているのだ。

そのことを察した鳩村は、慌てたように、

「あ、いえ、この事件の犯人を見つけてほしいという相談ではないのよ。犯人はもう判明しているの」

「え……？」

永緑は肩透かしを食らって、間の抜けた声を上げた。

「この事件は一応、解決済みの事件なのよ。でも、ちよつとだけ、気になることがあって……」

「い、いったい何なんですか、それは」

永緑が食いつくように訊いたが、そこで鳩村は悪戯っぽく笑って、「それは事務所に着いてから話すわ。電話で説明できるほど事件は簡単じゃないもの。今からそっちに向かったら……そうね、一時間ほどで着くかしら」

「……わかりました。できるだけ早く、早く来てくださいね」

永緑の声に歯がゆさがにじみ出ている。永緑の素直な反応が楽しかったので、鳩村はもう少しからかうことにした。

「あ、そうそう、ちなみに、今回の事件を推理小説のジャンルに当てはめるとしたら——ダイイングメッセージものになるわね」

「だっ、ダイイングメッセージですかっ？」

「じゃあ、今からそっちに向かうわ。またね」

「え、ちよつと待っ——」

電話を切ると、鳩村は先ほどと同じように笑い、

「やっぱり、面白い人ね……」

こっそりとつぶやいて、歩き出した。

2

永緑涼から電話のことを聞くと、明瀬匠悟は大笑いした。

「つまり、君は鳩村君に散々もてあそばれたあげく、得られた情報といえ、ダイイングメッセージが事件に関係しているという曖昧なものだけだったわけだね」

「いいじゃないですか。ダイイングメッセージが関わっているとわかったのは大きな収穫です。それがわかっただけでもできることはありますよ」

「例えば？」

少しむきになって発した言葉を追及されて、永緑は一瞬、言葉に詰まったが、

「た、例えば、えーと……そうだ、あれがあります。ダイイングメッセージの分類です。僕、前に作ったことがあるんです」

ちよつと待っててください、と永緑は言っ、事務所の奥の部屋へ、その分類をまとめたノートを探しに向かった。

明瀬匠悟は、ある雑居ビルの三階に、完全紹介制の探偵事務所を構えている。完全紹介制という言葉の通り、ここに訪れる人のほとんどは、彼らの知人か、知人に紹介された人物だ。わざわざそんな

ところに持ち込まれてくる事件だけあって、それらはどれも推理小説に出てくるような、不可解なものばかり。とりわけ、鳩村和音が持ち込む事件は、奇怪なものであることが多い。それは彼女の特殊な性質に関係している。驚くべきことに、彼女は日常的に事件に遭遇するのだ。

この性質は物心がついたころからのもので、中学校に入学するまではその事件を解決する者がいなかったため、迷宮入りする事件も多かった。が、中学で初めて同じ学校になった同級生の明瀬が持ち前の推理力を発揮し、事件を解決してくれるようになった。彼らは高校も一緒になったのだが、大学は別々の所に通うことになった。

明瀬と離れたことで、解決されない事件が増えるのではないかと鳩村は危惧したらしいが、それは杞憂だったそうだ。別の探偵が現れたという。ただ、彼女はその探偵が苦手らしい。

その一方、鳩村と離れたことで、身の周りで起こる事件が減るのではないかと明瀬は思っていたのだが、その予想も外れた。鳩村の憑き物がうつってしまったのだろうか、彼女がいなくとも、事件がときどき舞い込んでくるようになってしまった。迷惑な話であるが、そのおかげで明瀬は、探偵業のみで十分食べていけるくらいに稼げるようになったのだから、ある意味ではよかったのかもしれない。

明瀬が永緑涼と出会ったのは、大学二年生の時だった。所属していた推理小説研究会——通称「ミス研」に、当時一年生だった永緑が入会してきたのだ。

初めのうちは、重度のミスレリマニアである永緑が探偵役の明瀬を追い回すかたちだったが、やがては意気投合して、最終的には、明瀬が卒業後始めた探偵事務所で、永緑が住み込みで働くほどの親友になった。働くといっても、それは大学の授業がない日だけであったし、そもそも毎日依頼人が訪れるわけではないから、形だけの雇用だった。実質、明瀬が無償で永緑に部屋を貸しているようなものである。そのぶん、給料は安いのだが。

事務所を始めてから一、二年がたった。永緑は大学院に進学し、

今はミス研の会長を務めている。

「ちよつと奥の方にしまつてありましたけど、見つめましたよ」

永緑が奥の部屋から、一冊の大学ノートを手にして戻ってきた。

「ほら、これです。ダイイングメッセージの分類」

そう言つて永緑が見せたノートの表紙には、「私的試作的推理小説

分類等」と漢字ばかりを並べて仰々しく——ただ、残念なことにや

や丸文字ぎみの字で——書かれていた。

明瀬が座っているソファの、机を挟んで向かい側にあるもう一つ

のソファに永緑は座った。これは、二人で話をするときの定位置だ。

永緑がノートを机において、ばらばらと繰ると、「ダイイングメッ

セージに関する分類」と記されたページが現れた。

「高校生のときに作ったものなので、ちよつと変なところもあるか

もしれませんが、大きく間違つているところはないはずですよ」

と言つて差し出されたノートに一通り目を通すと、

「なるほどね。高校生でこんなものを作るなんて、いかにも君らしい」

明瀬は半ばあきれたようにそう感想を述べた。

その後、永緑による「ダイイングメッセージの分類」について議

論しているうちに、時間は瞬く間に過ぎて、鳩村の言つていた一時

間はすぐにやつてきた。

ノックの音が響いた。

「事件そのものの説明をする前に、説明しておかないといけないことがあるわ」鳩村はそう切り出した。

今、明瀬と永緑が同じソファに座り、その向かい側に鳩村が座つている状態で、三人の前には永緑が入れたお茶が用意されていた。

「事件を解決した探偵のことよ」

鳩村はため息をつくように言つた。

「探偵……というと、もしかして、君が苦手だと言っていた、例の探偵かい？」

明瀬が尋ねると、鳩村は頷いて、

「ええ、その探偵で合ってるわ。名字は木埜、下の名前は玄行。なんだか不自然な印象の字よ。こう書くらしいわ」

鳩村はその探偵の名刺を取り出し、二人に見せた。

そこには、白地に黒字で「不可縛探偵 木埜玄行」とだけ記されている。字体はごく一般的な明朝体だが、字面がどうにもおかしい。

「確かに、変な感じだね。名前もそうだけど、この『不可縛探偵』というのが何とも奇妙だ」

「その『不可縛』っていうのは、そのままの意味らしいわ。何ものにも縛られない探偵っていうことね」

「縛ることのできない探偵か……」明瀬はそうつぶやいてから、苦笑した。「確かに、つかみどころがないね、これは」

「そうでしょう？ でも、その名刺より、本人の方がもつとつかみどころのない男よ。出自は不明、年齢も不詳、名前すら本名かどうか。傲岸不遜で、何を考えているのか全くわからないし、それでいてすぐに事件を解決するし、しかも、解決したはずなのに何だか納得がいけないし……。もう、わけがわからないわ」

鳩村は頭が痛い、といった様子で言う。そこに永緑が、

「電話で聞いた時から気になってたんですけど、解決した事件なのに、その解決を依頼するというのは、どういうことなんですか？」

「それについては、事件の経緯をすべて話せばわかってくれると思うわ。ちよつとだけ、長くなるけど付き合ってくださいね」

ちよつとだけ、の部分を強調して言ったが、おそらく、ちよつとではない。鳩村は続けて、

「でも、その前に事件の関係者について話さないといけないわね。今紹介したように、探偵役は木埜という男よ。とにかく得体の知れない男なの。話の途中で、不可解な行動や発言がいくつつかあると思

うけど、彼に関するそれには、ある程度目をつぶってちょうだい。

それ以外の関係者は、あまり先入観を持たせてもいけないから、被害者や犯人といった推理小説的な立ち位置はばらさずに紹介していくわね」

それから鳩村は、カバンから取り出した手帳に、人物の漢字を書いてどんな字か見せながら説明し始めた。

「事件が起きたのは依田家という一家よ。祖母、父母、そして兄と弟の五人家族。ドラマにありがちな家族構成ね。」

祖母は依田佳苗、七十九歳。典型的な孫たちに甘いおばあちゃんといった感じね。

父の義弘、五十歳。佳苗の子供で、勤めている会社では重役らしいわ。子供にとかく厳しい——よく言えば古風、悪く言えば少し時代遅れな父親ね。そしてその妻、由紀、四十八歳。専業主婦。彼女も、言ってしまうえば、子供に夢中で周りが見えない教育ママだわ。

それで、彼らの長男、啓一。十八歳の高校三年生。この子はすごいわよ。完璧を体現したような人間ね。一流高校に通っている上に、成績は常に学年トップ。生徒会長も務めていたらしいし、運動に関しても優秀。彼は天才と言っていると思うわ。何を頼んでもそつなくこなすし、できないことはないんじゃないかって思うくらいよ。

ところが、その一つ年下で高校二年生の弟、啓二。彼は啓一とは対照的に、勉強が全然できないみたい。そのうえ、両親はさつき言った通り、子供に求めることが多い人たちでしょう？ だから、その圧力に耐えかねて……ええ、簡単に言うけど、グレちゃったの。あ、でも、そんなにたちの悪い不良少年じゃないのよ。仲間とつるむわけでもなく、ただ一人で夜にうろつくだけの徘徊少年……いや、これは違うわね。とにかく、彼は親に反抗して悪ぶっているだけで、本当に悪いことをしたいと思ってるわけじゃないわ。根は素直な子

なの。

……とまあ、これが依田家の人々。家族小説にでも出てきそうなくらいに型通りの、問題を抱えた一家でしよう？

依田家以外の関係者は一人だけ。丘本東助おかもととうすけという男よ。事件の日に家に居合わせたの。彼は依田義弘の知り合い——というか仕事相手で、依田家を訪ねたのはその日が初めてだったようね。

これで、主な登場人物の紹介は終わり。さて、ここからが本題ね。私、実は事件が起こった日の夜——昨日なんだけど——までは、この家族とは無関係だったの」

4

鳩村が明瀬のもとを訪れる前日。

彼女は夜の十時まで一人カラオケをしていた。特に嫌なことがあったわけでもないが、思いつき歌いたい気分だったのだ。

歌いたいただけ歌った鳩村は、すがすがしい気持ちで店から出たのだが、少し歩いたところで呼び止められた。振り返ると、二人の男が立っている。どう見ても高校生くらいの少年たちだ。二人の少年は鳩村に近づいて、財布出せよ、と迫った。

つまりは、カツアゲだ。

鳩村は心の中でため息をついた。面倒なことになったなあ、と。ここで手を出したとしたら、正当防衛になるだろうか……。

彼女の実家は、昔、柔道教室を開いていたことがある。彼女自身も、なかなかの達人だ。そして、柔道経験とは関係なく、単にその素質が彼女にあっただけかもしれないのだが、彼女は喧嘩にも強い。素手で戦うなら、不良三人くらいは何とか相手できるだろう。

そのくらい喧嘩の腕には自信があるのだが、ここで手を出す自分が犯罪者になってしまいかねない。かといって逃げるのも何だかしやくだ。

おい、早くしろ、と少年たちが急かす。

やはり、ちよつとだけ痛い目を見せてやろう。そう思った鳩村は、目撃者がいないか確認するため、辺りを見回した。すると、道の角に、目の前の二人とは別の少年が立っていて、その少年と目が合った。その途端、その少年は、

「おい、何してやがる！」

そう叫びながら、こちらに駆けてきた。その声に気をとられて二人の不良が振り向いた瞬間。

鳩村は一方の少年の袖を左手で、襟を右手でつかんで相手の懐に入り、振り上げた右足を相手の右足にかけて相手を崩した。大外刈という技だ。頭を強く打ってもいけないので、地面につく前に引っぱり、いったん相手の体を止めてから手を放した。

もう一人の少年は、仲間が女に倒され、さらに、怒ったように叫びながら男が迫ってくるので、混乱して逃げ出してしまった。鳩村に足技をかけられた少年も、這う這うの体で逃げ出す。

二人の不良がちよつと去ったところに。道の角に立っていた少年が駆けつけた。彼は鳩村の前で止まって、逃げていく少年たちと鳩村を交互に見比べ、少しあつけにとられた顔で、

「あんた、強いんだな」と一言だけ発した。

「ええ、私、喧嘩の腕には覚えがあるの」

今までいくつもの事件で修羅場を潜り抜けてきた鳩村は、そう誇った後、頬をかいて、

「……まあ、さつきのは喧嘩というより、柔道なんだけどね」

少年は鳩村の言葉が終わると、気まづくなつたのか、すぐに踵を返して、じゃあな、と立ち去ろうとする。

「ちよつと待って、君、名前は？」鳩村は少年を呼び止めた。

少年は振り返って、「何だよ、家に連絡するってのかよ」

「違うわ。私、いい不良には協力することにしてるの。ただ名前を聞きたかっただけ。あ、私は、鳩村和音よ」

「いい不良ってなんだよ……」少年はあきれたように言った。「それ

に、名前を尋ねるのは普通、ヒーローに助けられたやつだろ。俺はヒーローでもなければ、あんたを助けたわけでもねえよ」

鳩村は、確かにそうね、とくすくす笑った。

「そんなに面白いこと言ったか？ ……ああ、もう。わかったよ。磐二だ。依田磐二。じゃあな」

少年はおざなりに名乗って、今度こそ立ち去った。

5

次の日の早朝、鳩村の家に電話がかかってきた。誰からの電話か確認しようとしたが、非通知だ。迷惑だなあと思いながら受話器を取ると、最も聞きたくない声が響いてきた。

「鳩村君、早急に来てくれたまえ。事件だ」

木埜だ。鳩村は電話に出たことを後悔した。切つてやろうか、と思つたが、「何も聞かずに着るのはよくないな。この事件は君にも関係があるんだ」と、木埜はそれを見透かしているかのように言つた。

「私に関係がある？ いったいどういうことよ」

「君は昨日、不良少年と知り合つたらう。依田磐二という少年だ」

「え？ 彼がどうかしたの？」

「容疑者だ。兄殺しを疑われている」

そう告げられ、鳩村はその場にしゃがみこんで頭を抱えた。しまった、名前なんて訊くんじやなかった。

自分が関わっていなければ、と思つてしまうのは、事件に遭遇する原因が自分自身にあるのではないかと常々感じているからだ。しかし、事件はもう起こつてしまったのだから悔やんでも意味がない。「そつちに行くわ。どこにいるの？」

気を取り直して尋ねると、木埜は依田家の住所だけを教えて、すぐに電話を切つてしまった。道程は自分で調べろということらしい。仕方がないのでその通りにして、鳩村は依田家に向かった。

目的地は雰囲気のいい住宅街に建っている二階建ての一軒家だつ

た。

ここで間違いないだろうかと表札を確認した時、ちょうど家の扉が開け放たれ、気取つた様子で木埜が出てきた。木埜は黒いスーツを着て、黒いネクタイを締め、黒いハットをかぶり、黒い革靴を履いている。シャツだけは白いが、それ以外は黒で統一されているのだ。

「さあ鳩村君、家の中に入るんだ。警察が君を待っているぞ」

「警察が？」

私に何の用だろう、と疑問に思いながらも、促されるまま家に入る。正面には、二階に上がるための階段があり、その脇を通つて廊下がまっすぐ奥に伸びている。廊下の左右にはいくつか扉があり、その向こうにはリビングルームなどの生活スペースが広がっていると思われる。

階段を上つたところに目を向けると、そこには依田磐二が立っていた。何か言いたげだったが、「その部屋だ。早く行きたまえ」

木埜に急かされるので、仕方なく示された部屋に入った。そこは応接室らしき部屋で、中年の刑事が待つていた。

刑事が鳩村に座るよう促し、彼女が座ると彼らはその向かいに腰を下ろした。なぜか木埜も同席して、退路を断つように部屋の扉にもたれかかり、腕を組んで二人を眺めている。

「いったい、警察の方が私に何の御用でしょう？ 私は、昨日、磐二君に会つただけで、この家の方とはそれ以外一切の関係がないんですけど」

刑事から何か言われる前に、鳩村が訊いた。すると、中年刑事は、「ええ、そのことなんですがね、あなたが昨日、依田磐二君に会つていたということが重要なんです。まあ、順を追つてお話ししますから聞いてください」

と言つて、事件の説明を始めた。内容をまとめるとこうだ。昨夜、依田家には来客がいた。丘本東助という男だ。この男が依

田家に訪れたのは、予定されていたことではなく、突然の訪問であった。ずいぶんと迷惑な客だが、義弘の大事な仕事相手なので無下にもできない。

丘本の来訪に対応したのは、義弘と由紀だった。彼らは丘本をリビングルームに案内してそこで客をもてなした。

その間、佳苗はずっと一階の和室にこもっていた。佳苗は夫妻からや厭われているふしがあり、これはいつものことである。和室の中では、亡くなった主人の趣味で集められた骨董品を眺めて、その主人を思い出しているらしい。

啓一と磐二も、その時点では丘本と顔を合わせてはいない。啓一は二階の自室に閉じこもって勉強をし、磐二は丘本が来る前から外に出て夜の街を徘徊していた。

夜も更けて、そろそろ丘本に帰ってもらわなければならないと義弘たちが考えていた時、話題が彼らの息子、啓一の話になった。そこで、由紀が二階の部屋へ啓一を呼びに行った。どうやら、この時啓一を呼んだのは、啓一が察して、それとなく丘本に帰るよう伝えてくれないかと期待したからのようだ。どうもこの家族には、啓一に頼りすぎるきらいがあるらしい。それほど啓一が優秀だったということなのだろうか。

由紀は啓一の部屋の前に立ち、ノックした後で、中にいるはずの啓一に呼びかけた。しかし、返事が返ってこない。部屋を出る意思がないのかもしれないが、返事がないというのは妙だ。寝ているのだろうか。

入るわよ、と言いながら、ゆっくりと扉を開く。隙間から光が漏れ出してきたので、寝ているわけではないらしい。

そして、扉を全開にした時、彼女の目に飛び込んできたのは衝撃的な光景だった。

啓一がうつ伏せになって倒れていたのだ。血は出ていないが、一切動く気配はなく、一見して死んでいると悟ることができる。床には机の上に置いてあったはずの参考書やノートが散らばっていた。

啓一の左手がそのうちの一冊のノートを押さえていて、右手はペンを持ち、そのノートに何かを書き込んでいるような体勢である。そのペンの先を見ると、ノートには、「ハンニ」の文字が書き残されていた……。

十時四十分のことであった。

「それから、我々警察が来て調べますと、啓一君の死因は後頭部を強く打ったこと——つまり、頭部外傷によるものです。部屋には天井まである背の高い本棚がありまして、その上段の本をとるための小さな脚立があっただんですが、それが倒れていたのです、おそらく、その脚立に乗って本に手を伸ばしていたところ、何者かに突き飛ばされてバランスを崩し、倒れた時に床に強く後頭部を打ち付けたものと思われます。

それと、床に散らばった参考書やノートですが、これは、倒れる時に体の支えを探して、とっさに勉強机に手を伸ばし、その拍子に机の上の参考書やらが落ちたんでしょう。そして、啓一君は落ちてきたノートとペンを手に取り、最期にダイイングメッセージを書き残そうとしたと、こういうことになりますかな。

殺し方からして、衝動的な犯行でしょう。脚立から突き飛ばしただけでは死ぬかどうか疑問ですからね。これは計画性に欠ける。一応言っておきますと、脚立なんて不安定な物の上に乗った人を突き飛ばすのは、誰にだってできます。犯行方法で容疑者を絞ることは不可能なわけです。

それで、その容疑者のことなんです、まあ、どう考えても、この家の中にいた人物にしか犯行は無理ですわな。外部犯とは考えにくい。玄関から入るにはもちろん鍵が必要ですし、家の窓はどこも閉まっていたようですね。俗に言う密室のような状態だったわけですな。密室の中で殺人が起きたなら密室の中に犯人がいる道理です。

ただし、事件の起きた時間帯に家の外いたと主張しているものの、鍵を所持しているために、容疑者に含まれる人物が一人だけいるん

ですな。そう、磬二君です。

死亡推定時刻は九時から十時の間でして、この時間、磬二君が外にいたということが確認できればアリバイが成立するんですが、九時四十五分ごろまでのアリバイは確認できたものの、それ以降のアリバイはまだないんですな。そのアリバイが示せない限りは、家にこっそり帰って兄を殺し、また外に出て行った可能性があるわけですから、依然容疑者として扱うしかありません。

しかし鳩村さん。あなた、昨日磬二君に会ったそうですね。どこで、いつごろ会われました？ その時間によつては磬二君のアリバイが成立するんですがね」

刑事の質問に、鳩村はしばらく考えてから、磬二と昨日会った場所と時間を答えた。その場所はここからだいたい十分か十五分はかかるころだ。会ったのは十時過ぎだったので、これで磬二のアリバイが立証された計算になる。

が、証言を確認した刑事は、頭を叩いて、「いやはや、しかし、困りましたな……」

「どういうことですか？」鳩村が訊く。

「いやあ、結構有力な容疑者だったんですよ、磬二君は。確かに、ほかの家族や丘本さんにも犯行は可能です。リビングルームにいた義弘、由紀夫妻と丘本東助は、それぞれお手洗いに行くために席を外した時間がありますし、佳苗も和室を出て二階に向かうことは十分に可能です。」

しかし、動機がね……。祖母の佳苗は孫に甘かったようですし、両親も優秀な啓一君をかわいがっていました。昨日初めてこの家を訪れた丘本さんも、面識がない啓一君を殺すとは思えない。その点、磬二君には動機となりそうなものがある。磬二君は周りから、常に啓一君と比べられながら育ってきたと思われれます。『兄の啓一はできるのに、弟の磬二は……』とね。そんな中で、磬二君が啓一君を憎むようになっていったとしても不思議はありません。磬二君が疑われたのも無理のないことでしょうか？

ほかにも、磬二君を疑う理由はありません。先ほどお話した、被害者が書き残したと思われる『ハンニ』の文字なんですがね。二通りの解釈ができるわけなんですよ。一つは、『犯人は誰である』と書こうとしたが、『ハンニンハ』の途中で力尽きて『ハンニ』になつてしまったという解釈。

そしてもう一つが、あのメッセージが磬二君のことを示しているという解釈だったんですな。どういうことかと申しますと、磬二君の『磬』の字は画数が多いでしょう？ だから『磬』は早く書けるカタカナ表記にし、『ニ』はもともと画数が少ないためにそのまま書いて『ハンニ』となつてしまったという解釈なんですな。

なかなか理にかなった解釈でしょうか？ こういうこともあって、磬二君はかなり有力な容疑者だったわけです。しかし、あなたの証言が本当だとすると、どうやら、彼は犯人ではないらしい。あのダイニングメッセージはやはり、『ハンニンハ』の書きかけだと考えた方がよさそうだ。ただ、そうなると、容疑者がいなくなつてしまひましてね。さて、いったい誰が犯人なのやら」

うーん、悩ましい、と刑事は唸つた。どうやら刑事の話はこれで終わりらしい。その後、刑事が礼を述べてから、鳩村は木柱と部屋を出た。すると、部屋の前には、少し気まずそうに目をそらしながら磬二が立っていた。

「ちよつと、話があるんだ。来てくれねえか」

磬二の言葉に、ええ、いいわよ、と鳩村が了承すると、磬二は鳩村を二階の自室に案内した。木柱はついてこなかった。

「それで、話つていうのは何かしら」

磬二がそわそわしているだけで言い出しづらそうだったので、彼女はそう促した。磬二は、ああ、と頷いて話し始めた。

「兄貴のことなんだけどよ、実は最近、結構追い詰められてたみたいなんだよ」

「追い詰められてた？ お兄さんが？」

「そうなんだ。兄貴はもう受験も近かったからその勉強のせいもある

るんだろうけどよ、それだけじゃない。普通にもう疲れてたみてえなんだ。何て言ったらいいんだろうな、その、完璧を演じるのがつらくなってるんだよ。それなのに、自分は完璧じゃないと、って馬鹿みたいに思い込んでやがったんだ。それで、最近はどうノイロロゼ気味になって、そのくせ親とか他人の前では完璧を装って……」

そこで磐二はいったん言葉を止めた。そして、じれったそうに、「ああ、もう。うまく言えねえな。とにかく、兄貴は複雑だけどまっすぐなやつだったんだよ。なのに、どうして殺されたんだ？ 理不尽じゃねえか。俺みたいなやつが殺されるならわかるけどよ、兄貴みたいなやつがどうして死ななきゃいけないんだ。」

俺は、兄貴を殺したやつだけは許すことができそうにない。だから、頼む。犯人を捜してくれねえか？ そりゃあ、警察も動くんだろうけどよ、俺自身も何かしねえと気がおさまらねえんだ。とはいえ、俺にはどうも、犯人を見つけないとできそうにない。だからせめて、犯人を見つけれそうな人に頼むことだけでも思ってるやつとお願ひしてるんだ。なあ、頼む。犯人を見つけてくれ」

磐二は真剣な目で懇請した。

6

鳩村はそこまで語って、明瀬に尋ねた。

「どう？ ここまでで犯人の目星はついていたりするかしら？」

「犯人の目星、ねえ……」明瀬は考え込むように言った。「ついていると言えば、ついてるけど……」

「どうしたんです。何か問題でも……？」と永緑。

「うん。考えていることはあるんだけど、ただ、その理由が消極的なものしかなくてね」明瀬は少し困ったように言った。

「どんな考えなんですか？」永緑は解答を求めて訊いた。

「いや、今の段階でこれを言っても仕方がないと思うよ。これは、それ以外のアプローチがすべて行き詰まったときだけ、選ぶことの

できる解釈だろうからね」

「じゃあ、今の時点で言えることは何もありませんか？」

「そういうわけでもないよ。さっき話し合ったダイイングメッセージの分類を使って、今回の事件がどれに当てはまりそうか調べてみるといっただい？」

「ダイイングメッセージの分類って？」

鳩村が訊くと、永緑は例のノートを取り出して、

「これです。鳩村さんから、ダイイングメッセージが今回の事件のキーワードだと聞いたので、鳩村さんがここに来るまでの間、この分類について話し合っていたんです」

「へえ、ダイイングメッセージの分類なんてあるんだ。聞いたことがないわね」

「そうですね。ミステリの分類と言えば、ジョン・デイクスン・カークの『三つの棺』の『密室講義』に代表される、密室ものの分類が中心ですから。でも、それ以外の分類も色々あるんですよ。例えば、有栖川有栖の『マジックミラー』には、『アリバイ講義』が出てきますし、三津田信三の『首無の如き祟るもの』では、『首の無い屍体の分類』がなされています。もちろん、それほど有名ではありませんが、ダイイングメッセージに関する分類もありますよ。現に、倉知淳の短編集『猫丸先輩の空論』所収の『水のそとの何か』には――」

「永緑君、そろそろダイイングメッセージの分類に移ろうか」

いつまでたっても分類が始まりそうになかったので、明瀬がストップをかけると、

「……すいません、ちよっと夢中になりました」と永緑は反省して、「僕だとちよっと長くなりすぎるので、先輩が説明してください」と言った。

明瀬はそれを受けて、「じゃあ、説明しようか。永緑君の分類では、まず、分類する観点を三つに分けているね。すなわち――

ダイイングメッセージの性質に関する分類

ダイイングメッセージから犯人等を導き出せない原因に関する分類

ダイイングメッセージの内容の意図に関する分類

——この三つだ。では、初めに、『ダイイングメッセージの性質に関する分類』から確認していこうか。この観点による分類では、ダイイングメッセージが誰の意図によって残されたかで四つに分けて、その後さらに細分化している。一つずつ見ていこう。補足説明が必要だと思われるところだけ、説明していくよ。

ダイイングメッセージの性質に関する分類

① 被害者の意図のみである場合

- a. 伝えたいことを直接的に表現している場合
- b. 婉曲的に、または暗号化して表現している場合
- c. 表現できていない場合

② 犯人の意図のみである場合

- a. 伝えたいことを直接的に表現している場合
- b. 婉曲的に、または暗号化して表現している場合
- c. 表現できていない場合

①と②は、意図が誰のものであるかが違うだけで、それ以外は同じだ。『c. 表現できていない場合』についての補足だけしておく、これは、ダイイングメッセージが書きかけだったり、文字が読めなかったりする場合だね。

③ 被害者の意図に犯人の意図が加えられている場合

- a. 被害者のメッセージを犯人が改変した場合
- b. 被害者のメッセージを犯人が隠蔽した場合
- c. 被害者のメッセージをあえてそのままにした場合

『c. 被害者のメッセージをあえてそのままにした場合』。これはちよつと特殊だけど、犯人が被害者のメッセージを発見したにもかかわらず、改変も隠蔽もせずにそのまま放っておいた場合だ。そのことで犯人にもたらされる利益としては、例えば、犯人が第一発見者になったときに、ダイイングメッセージがその第一発見者である犯人を示していたとする。その場合、関係者は『第一発見者が犯人であれば、他の誰かに見つからないうちにダイイングメッセージを消すはずだから、第一発見者は犯人ではないだろう』と思うわけだね。これで、犯人が容疑者から外れることが出来るわけだ。

④ それ以外の人物の意図が含まれている場合

- a. 第三者が改変や隠蔽、捏造をした場合
- b. 解読者がわざと間違えて解読した場合
- c. 解読者が答えを伝えていない場合

⑤ そもそもメッセージではない場合

⑤は、関係者がダイイングメッセージだと思っていたメッセージが実は偶然的産物で、誰の意図によるものでもなかった場合だね。ここまでは『ダイイングメッセージの性質に関する分類』だ。

じゃあ、次は『ダイイングメッセージから犯人等を導き出せない原因に関する分類』だね。これは先に、誰に原因があるのかで三つに分け、その後、それぞれ細分化しているね。

ダイイングメッセージから犯人等を導き出せない原因に関する分類

類

① 被害者に原因がある場合

- a. 被害者のメッセージが難解である場合
- b. 伝えたいことを表現できていない場合

② 犯人に原因がある場合

- a. 犯人がメッセージを捏造した場合
- b. 犯人が被害者のメッセージの改変や隠蔽をした場合

③ それ以外の原因がある場合

- a. 第三者が改変や隠蔽、捏造をした場合
- b. 解読の指針が間違っている場合
- c. 答えや解読のヒントを黙っている人物がいる場合
- d. メッセージの存在を認識できていない場合
- e. そもそもメッセージではない場合

この分類について追加で説明するところはないね。次の分類に映ろう。次は『ダイイングメッセージの内容の意図に関する分類』だ。これは、メッセージが真実を伝えるものか否かで分けた後、細分化している。

ダイイングメッセージの内容の意図に関する分類

① 真実を伝えようとしたメッセージである場合

- a. 犯人を示そうとしている場合
- b. 被害者が自らの意思を示そうとしている場合
- c. それ以外の事柄を示そうとしている場合

② 虚偽を伝えようとしたメッセージである場合

- a. 犯人を誤認させようとしている場合
 - b. 被害者の意志を誤認させようとしている場合
 - c. それ以外の事柄を誤認させようとしている場合
- ③ そもそもメッセージではない場合

この分類でも、特に補足することはないかな。

……さて、ここまでざっと永緑君の『ダイイングメッセージの分類』を確認してきたわけだけど、では、今回の事件のダイイングメッセージは、どこに分類されるのか。それを考えてみよう。

『ダイイングメッセージの性質に関する分類』では、初めに、そのダイイングメッセージが誰の意図で残されたもので分類されているわけだけど、この事件では、被害者の啓一君が残したものか、あるいは、犯人が残したものだと考えて間違いないだろう。『ハンニ』という文字が、犯人に改変されたものであったり、第三者の捏造や改変によるものとは考えにくいから、考えられる分類は――

① 被害者の意図のみである場合

- c. 表現できていない場合

② 犯人の意図のみである場合

- a. 伝えたいことを直接的に表現している場合

③ 被害者の意図に犯人の意図が加えられている場合

- c. 被害者のメッセージをあえてそのままにした場合

このいずれかになるわけだね。これらはそれぞれ――

啓一君は犯人の名前を書き残そうとしたが、途中で力尽きた犯人が磐二君を疑わせるため、ハンニ、とメッセージを残した

メッセージが磐二を示すように見えることを犯人が利用した

——という解釈になる。

『ダイイングメッセージから犯人等を導き出せない原因に関する分類』では、まず、原因が被害者にあるのか、犯人にあるのか、はたまたどちらでもないのか、という分け方をしたね。メッセージは難解なものではないし、むしろ単純すぎるために、犯人や第三者が改変したものではないと考えられる。そして、この事件のダイイングメッセージの場合は、何を書こうとしたかはわかるし、もちろん、暗号のように解読が必要なわけでもないから、考えられる分類としては——

① 被害者に原因がある場合

b. メッセージを表現できていない場合

② 犯人に原因がある場合

a. 犯人がメッセージを捏造した場合

——この二つのうちのいずれか、ということになる。それぞれがどういうことを表しているのかを、簡潔に言い換えると——

い 被害者のメッセージが書きかけであるため、犯人が伝わらない

犯人が残したメッセージであるため、参考にならない

——ということになるね。

最後に、『ダイイングメッセージの内容の意図に関する分類』だ。この分類では、最初に、内容が何を伝えようとしているのかで分けられている。この事件では、メッセージを残した人物が誰であるにせよ、伝えんとする内容は犯人の名前だね。だから、考えられる分類としては——

① 真実を伝えようとしたメッセージである場合

a. 犯人を示そうとしている場合

② 虚偽を伝えようとしたメッセージである場合

a. 犯人を誤認させようとしている場合

これらはつまり——

ダイイングメッセージは事件の犯人を伝えようとしている
メッセージは事件の犯人を誤認させようとしている

——という解釈だ。じゃあ、ここからはようやく今度の事件の分類をまとめる段階だね。今までの内容を総合すると——

ダイイングメッセージの性質に関する解釈

啓一君は犯人の名前を書き残そうとしたが、途中で力尽きた
犯人が磐二君を疑わせるため、ハン二、とメッセージを残し

た
メッセージが磐二を示すように見えることを犯人が利用した

い 積
ダイイングメッセージから犯人等を導き出せない原因に関する解

被害者のメッセージが書きかけであるため、犯人が伝わらな

い
犯人が残したメッセージであるため、参考にならない

ダイイングメッセージの内容の意図に関する解釈

ダイイングメッセージは事件の犯人を伝えようとしている
メッセージは事件の犯人を誤認させようとしている

——と、こうなるね。これから事件の解釈を組み立てるわけだけ

ど、一つだけ注意点というか、言っておくべきことがあるんだ。『ダイイングメッセージの性質に関する解釈』のうち、次の二つ、

啓一君は犯人の名前を書き残そうとしたが、途中で力尽きた
メッセージが磬二を示すように見えることを犯人が利用した

この二つは、どちらであつてもストーリーにはほぼ違いはないよね。犯人がダイイングメッセージを確認したかどうかという差だけだ。だから、ここでは同等に扱うよ。

では、今回の事件をまとめよう。今回の事件の解釈としては大きく二つに分かれる。被害者がダイイングメッセージを残したか、犯人が捏造したかだ。被害者がダイイングメッセージを残した場合の解釈の組み合わせとしては――

い 啓一君は犯人の名前を書き残そうとしたが、途中で力尽きた
被害者のメッセージが書きかけであるため、犯人が伝わらな

ダイイングメッセージは事件の犯人を伝えようとしている

この三つか、あるいは――

い メッセージが磬二を示すように見えることを犯人が利用した
被害者のメッセージが書きかけであるため、犯人が伝わらな

い ダイイングメッセージは事件の犯人を伝えようとしている

この三つの組み合わせだ。どちらでも解釈は同じになる。すなわち、『啓一君は犯人を伝えようとして、ダイイングメッセージを書いたが、途中で息絶えたため、犯人はダイイングメッセージによって判明しない』ということになるね。

次に、犯人がメッセージを残した場合の解釈の組み合わせは――

犯人が磬二君を疑わせるため、ハン二、とメッセージを残した

犯人が残したメッセージであるため、参考にならない
メッセージは事件の犯人を誤認させようとしている

と、こうなるね。要するに、『犯人は磬二君を疑わせ、事件の犯人を誤認させるためにメッセージを残したが、磬二君が容疑者から外れたため、メッセージに意味がなくなった』ということだ。

しかし、この解釈はどうだろう。家族は磬二君の外出を知っていたわけだから、彼が容疑者から外れる可能性は十分にあるとわかっていたはずだ。余計なことをして、証拠を残してしまう恐れもあるのだから、そんなことはしないのではないだろうか。

かといって、丘本さんには、磬二君を疑わせるために『ハン二』というメッセージを残すことはできない。なぜかと言うと、丘本さんは磬二という字を漢字でどう書くか知らないからだ。磬二の『磬』の字はカタカナで書かれていたから関係ないけど、磬二の『二』は別だ。通常、『ハンジ』の書き方は二通りある。つまり、漢数字の『二』を使った『ハン二』と、『次』という字を使った『ハン次』だ。漢字の説明をされなければ、その二つを区別することはできない。磬二君は一家の汚点のような扱いをされていたから、夫妻が彼の名前を丘本さんに告げたかどうかすら怪しいんだよ。ましてやその漢字の説明だなんて、到底されたとは思えない。丘本さんには『ハン二』というメッセージを残すことはできないんだ。

以上から、犯人が磬二君を疑わせようとしたとは考えにくい。だからやっぱり、『啓一君は犯人を伝えようとして、ダイイングメッセージを書いたが、途中で息絶えたため、犯人はダイイングメッセージによって判明しない』という解釈に落ち着くだろうね。

さて、ここまで――推理ではないけど――永緑君の分類でいくと、

この事件はどう分類されるのかを論じてみた。得られた結論は別段驚くようなものではないね。事件の犯人が絞れたわけでもない。

ただし、全く成果がなかったわけではないよ。ダイイングメッセーの分類の説明をする前に言ったけど、今自分が考えている可能性は、それ以外の可能性がすべて否定された時にだけ選べるような、いわば究極的な解釈だからね。否定的な結果が出たことこそが肯定的な結果であるとも言える。

……まあ、それは言い訳になってしまふかな。とりあえず、これでダイイングメッセーの分類は終わりだ。どうかな、鳩村さん。こんなところでいいかい？」

明瀬は圧倒的な長台詞の最後に、鳩村に訊いた。

「ええ、明瀬君の言う『究極的な解釈』とやらが気になるけど、まあいいわ。じゃあ、話の続きなんだけど、あの後、木柙が推理を始める直前に、もう一つ殺人が起こったの」

7

「——なあ、頼む。犯人を見つけてくれ」磐二が言った。

鳩村は少年のまなざしを重く受け止めながら、しばらく黙っていた。そして、彼女が口を開こうとしたその時——。

悲鳴が響いた。下の階からだ。

呆けている磐二に「降りるわよ」と声をかけて鳩村は部屋を走り出た。階段を駆け下りて、どの部屋からの声だったのかと周りを見回すと、木柙が奥の部屋の開いた扉の前に立ち、顎を動かして鳩村を招いていた。失礼な態度は気にしないで鳩村はそこに走り寄る。少し遅れて磐二も降りてきた。

問題の部屋は和室らしい。佳苗がいつもこもっているという部屋だ。

鳩村が中を覗きこむと、部屋の中には鳩村と木柙、磐二以外のこの家にいる全員が和室に揃っていた。ただし、そのうち丘本だけは

こと切れていたのだが。

壺やら巻物やら仏像やら——おそらくは、佳苗の今は亡き夫の趣味で集められたのだろう——が和室の床の三分の一ほどを占領している。その中心に頭から血を流して丘本が倒れ、辺りには何かの破片が広がっている。

「いったい何が起こったの？」鳩村は声をひそめて木柙に訊いた。

「依田佳苗が丘本を殺したんだ」淡々と木柙は答えた。

「え、いったいどういうこと……?」

「リビングに全員が君たちと依田佳苗以外の全員が集まっていたところに彼女がやってきて、丘本を和室に呼んだんだ。しばらくして、和室の方から何かが碎けるような音が聞こえてきた。由紀と刑事が確認のために和室に向かうと、そこで丘本が死んでいて、隣に佳苗が立っていた。さつき君が聞いたであろう悲鳴は、発見した由紀のものだ。その声を聞いて全員が駆けつけ、直後、君たちも降りてきたというわけだ」

丘本の周りに広がっているのは壺の破片だな。彼女は手元にあった壺で丘本を殴り殺したわけだ」

そう話す木柙は、なぜか口の端をつり上げて不気味に笑っていた。鳩村に説明し終えると、木柙は芝居気たっぷりに、大股で部屋の中へ歩き始めた。

「皆さん、先ほどここで殺人が起こりました」よく通る声で木柙は言った。「その犯人はもちろん依田佳苗さんだ。状況から見ても、それに異論をさしはさむような酔狂はいないだろう。さて、一応訊いておこう。佳苗さん、どうして丘本を殺したんです?」

木柙は佳苗の前に立ちふさがり、彼女を見下ろすようにして尋ねた。

佳苗は柔和な表情でじっと丘本の前に座っていたが、木柙に質問されると、顔を上げてしゃがれた声で、

「はいはい、その人を殺した理由ですか。それはもちろん、その人が啓一を殺したからに決まっていますでしょう」

さも当然というような口調で言う佳苗に、木埜は、「ほう、啓一君を殺した犯人は丘本だと？ どうして？」

「だって、義弘や由紀さんや磐二が、啓一を殺すだなんてことはあるはずがないですもの。その男が殺したに決まっているわ」佳苗はにこにこ笑っている。

「か、母さん、何てことを……！」と義弘が母を恐れるように漏らした。

それに加勢するように由紀が、

「そうよ。本当に丘本さんが犯人だったかもわから——」

「わかるさ」言いかけた言葉を木埜が遮った。「啓一君殺しの犯人は丘本東助だ」

「聞き捨てなりませんな。それはいったいどういう理由でおっしゃっているのですかな？ 木埜さん」

この時、木埜の言葉に冷静に反応できたのは、この刑事と鳩村ぐらいだったろう。

「いいだろう。少しだけ私の考えを述べさせてもらおうか」

あくまでも不遜な態度で、木埜は推理を始めた。

「この際、動機なんてどうでもいいだろう。磐二君を除いた関係者全員にそんなものは見当たらず、磐二君に犯行は不可能なのだから条件は一緒だ。犯行方法に関しても、あんなこと、誰にだってできる。不安定な台の上の相手を押し飛ばすなんて、この佳苗さんにも可能だろう。」

動機、手段の条件は磐二君を除く全員が同じ。となれば、手掛かりは一つ。ダイイングメッセージだけだ」

「ちよっと待って。ダイイングメッセージって、『ハンニ』の文字だけでしよう？ そんなもの参考にならないわ」鳩村が口をはさむと、「はたしてそうだろうか。君たちはそのメッセージが犯人の名前を伝えようとしているものだと思っ込んでいるが本当にそうか？ 犯人の名前を伝えたいだけなら、その名前だけを書けばいいことじゃないか」

そこで刑事が訊いた。「それはつまり、あのメッセージだけで既に意味を成している？ そうなると磐二君が犯人ということになつてしまいますが……」

「いや、彼は犯人ではない。アリバイがあるのだからな。犯行可能な者の中から、あのメッセージ示そうとしている人物を推定すべきだ。」

では、わざわざ『ハンニ』というメッセージを残すのはどういったときだろうか。『ハンニハ』と書こうとしたのは間違いないだろう。しかし、その下に続けようとしていたのが犯人の名前だったとは限らない。というより、犯人の名前ではおそらくない。先ほども言ったように、名前を伝えたいなら名前だけ残せばいい。犯人の名前をダイイングメッセージとして残す例などごまんと——とはいっても推理小説中の殺人ぐらいだが——あるのだから、十分に伝わる。

しかし、犯人の特徴を書こうとしたなら話は別だ。例えば、犯人が白いシャツを着ていたの、被害者が『シロイフク』とメッセージを残したとする。が、『シロイフク』では何だか説明不足の感があるだろう？ 白い服がどうした、という感じだ。犯人が白い服を着ていたのか、白い服を探してほしいのか、白い服に何かが隠されているのか、いまひとつ何が伝えなかったのかよくわからない。しかも、被害者の啓一君は——それが親に求められていたから取り繕っていただけかもしれないが——完璧主義者だ。物足りない感じのする特徴だけ記しておくなんてことは、できなかったのではないかと思うね。それゆえに、彼は『ハンニハ』と書き残そうとしたんだ。

では、ここで一つ、疑問が生じる。すなわち、なぜ啓一君は犯人の名前を残すのではなく、特徴を書こうとしたのか……。

答えは簡単だ。彼は犯人の名前を知らなかったのだよ。名前を知らなければ、犯人を示すときには、その特徴を残すしかない。そして、この事件の関係者の中で、啓一君が唯一名前を知らなかったであろう人物は、今そこで死んでいる丘本東助だけだ。丘本がこの家に来たのは初めてだったし、啓一君は二階から降りてきていなかった

たため、丘本の名前など知る由もない。ただ一人、啓一君が知らなかった名前が丘本東助だったのだよ。

よって、事件の犯人は彼だ。きっと、啓一君が書こうとしていたのは、『ハンニハシラナイオトコ』のような文面だったに違いない。まあ、完璧なメッセージを残そうとして、逆に不完全なメッセージになるというのはなかなか皮肉だがね」

8

「その後、佳苗さんは逮捕され、ひとまず事件は解決したことになるんだけど、どうしても腑に落ちないのよね」鳩村は不満顔だ。

「僕もその解決にはちよつと納得がいきませぬね。何だかこじつけめいていますし……」永緑も口をとがらせている。

そして、明瀬は苦笑いしていた。

「よくもまあそんな解釈を考えだせたもんだね。なるほど、そう言われると、そんな気もしてくるから不思議だ」

おどけたように言う明瀬に、永緑が迫る。

「それで、どうです？ 話す気になりましたか？ 先輩の解釈」

「そうだね……。もう言うしかないかな。新しい解釈は出てきそうもないし」

「すると、いよいよ明瀬匠悟の推理披露となるわけね」

「そんなたいそうなものじゃないけど……。まあ、とりあえず始めようか。一応確認しておく、この事件の関係者の中には、啓一君を殺す動機のある者はいない、ということに関して異論はないよね？」

「ええ、だからこそ不思議なのよ。誰にも動機がないから、ダイイングメッセージに頼りたいところなんだけど、肝心のそれも書きかけとなると、もう犯人を推測する手がかりがなくて……。かといって木柱の解釈を信じるのはちよつとね……」

「違う。その探偵の解釈では、万人を納得させることはできない

いだろうね。でも、だからと言って、そうでないと断定することもできないんだよ。その理由は、事件の論点が、他人が勝手に決めつけることのできないもの——つまり、動機にあるからだ。したがって、これから話す解釈も、あくまで推測で、これが事件の真相だと言いつもりはない。

あまり前置きが長くなると怒られそうだから、本題に入ろう。

啓二君を除いて、全員が啓一君を殺害可能だった。手段に謎はない。となれば、やはり、問題になってくるのは二つの動機だ。第一に、啓一君を殺す動機。そして第二に、『ハンニ』というダイイングメッセージを残す動機だ。

まず、啓一君を殺す動機。これを持っている人がいない、というのが今回の事件の未解決事項の一つだったね。啓一君と面識がない丘本さんはもちろん、両親は息子を自慢に思っていたし、祖母にもかわいい孫を殺す理由は見当たらない。唯一動機があるのではないかと疑われていた啓二君も、実際は兄に殺意を抱いていたわけではない。仮に兄の殺害を考えていたとしても、彼にはアリバイがある。

……と、このように、誰も啓一君を殺した人物だと思えない状況なわけだ。君たちも、ここまでは何度も考えを巡らせたはずだね？ でも、ある考えに誰も言及していないところを見ると、みんなここで立ち止まってしまったらしい」

「そ、その、誰も言及していない考えというのは、いったい何なんですか」永緑が急かすように言う。

相変わらずのせつかな反応に、明瀬は苦笑いしながら続けた。

「その考えというのは、そもそも、誰にも動機がないのだから、誰も啓一君を殺していないのではないか——つまり啓一君の死は、殺人ではなく、そして自殺でもなくて、事故だったんじゃないかということなんだ。

脚立に乗って本棚の上段にある本を取ろうとした啓一君は、バランスを崩して転倒し、床で後頭部を強打して死亡した。そして、死

の間際に、ダイイングメッセージを残したんだ」

「ま、待ってください。事故で死ぬ人間が、ダイイングメッセージを残したって言うんですか？」永緑は激しく狼狽した。

「うん、そうなんだ。その理由を説明する前に、永緑君のダイイングメッセージの分類をおさらいしておこう。あの分類では――

ダイイングメッセージの性質に関する分類

ダイイングメッセージから犯人等を導き出せない原因に関する分類

ダイイングメッセージの内容の意図に関する分類

――この三つの観点で分類していたよね。でも、この事件を解決するには、もう一つ、別の観点からの分類が要る。すなわち――

ダイイングメッセージを残す行為そのものの理由に関する分類

――これだ。そもそも、メッセージを残すという行為がどういった役割を果たすのかを考えていきたいと思う」

それを聞いて、鳩村が思わず尋ねた。

「ダイイングメッセージを残す理由って、何かを伝えるためでしょう？ それ以外にあるのかしら？」

「確かに、伝えることがあったからメッセージを残す、というのも一つだろうね。だから――

① 何かを伝えるため

――これが一つ目だ。他に考えられる可能性としては、こんなものがある。例えば、床に残っている痕跡を隠すためにその上に血で

ダイイングメッセージを残すといった場合。つまり――

② メッセージを残す手段や動作などに意味があったため

――という理由だね。そして、愉快犯的だけど、ダイイングメッセージを残したかったから残すといったパターンで――

③ ダイイングメッセージを残すため

――これも考えられるね。とりあえず三つ挙げてみたけど、『①何かを伝えるため』以外は、今回の事件には当てはまりそうにない。じゃあ、啓一君が『ハンニ』とメッセージを残した理由が、何かを伝えるためであり、しかも、彼の死が事故であったとするとどうなるだろうか？」

明瀬は二人に問いかけた。しばらくして、鳩村が、

「啓一君は、自分が、磐二君に殺されたように見せかけようとした……？」

明瀬は頷くと、「そう、確かに、ダイイングメッセージを残した理由が、何かを伝えるためであった場合は、啓一君が磐二君を犯人に仕立て上げようとした、という解釈になるだろう。しかし、啓一君が磐二君を恨む理由があったようには思えない。となると、やはり、何かを伝えるためという解釈は違うだろうね」

「それじゃ、もう検討すべき解釈がありませんよ」永緑が情けなく言う。

「うん。だから、ここで『ダイイングメッセージを残す行為そのものの理由に関する分類』に第四の理由を追加しよう。

④ 他殺に偽装するため

――という理由だ。つまり、啓一君は、本来は事故であったこの

事件を殺人に見せかけるために、ダイイングメッセージを残そうとしたんだ。ダイイングメッセージで犯人を指摘するような内容を書けば、その事件は犯人の存在を前提として認識されるからね。現に、君たちはさっき言われるまで、殺人以外の可能性を考えてもみなかつたみたいだし——」

「ちよ、ちよと待ってください。啓一君がどうしてダイイングメッセージを残してまで殺人に見せかける必要があるんですか。それ以前に、啓一君がそんな死に方をするなんて——」

永緑が言いかけると、明瀬は声に力を込めて、「そう。それだよ。『啓一君は完璧な人間である』という周囲の認知こそが、この事件の原因であり動機なんだ。」

啓一君は親からずっと完璧であるよう求められるうちに、自分は完璧でなければならぬと思ひ込むようになっていたと、警二君も言っていたよね。ノイローゼ気味になってもなお、両親の前では完全を装っていたと。そんな彼が唯一、誰にも気を配らなくて済んだ場所が自室だったんだ。少しくらい気が緩んでも、これは仕方がないと思うね。

そして同時に、完全無欠でなくてはならない彼は『あの啓一君があんな死に方をするなんて』と思われれることを避けねばならなかったんだよ。彼にとつて、自分の死は少なくとも、事故のようない見方によつては馬鹿げた——死に方であつてはいけなかつたんだ。

だから、彼はダイイングメッセージを残した。事故を他殺に偽装しようとしていたと考えれば、『ハンニ』のメッセージもうなずけるね。彼は『ハンニハ』とだけメッセージを残そうとしたんだ。これは下に何か言葉が続くわけではなく、これのみで完結したメッセージだ。単に、犯人が存在する、とそのダイイングメッセージを見た人に思い込ませるためだけに残したのだから、その下に犯人の名前や特徴を続ける必要はない。つまり、あのダイイングメッセージは、犯人を捏造するためのものだったわけだね。

ただ、当たり前のことだけど、殺人に見せかけるなら、犯人が存

在しなければならぬ。だから、無実の警二君が疑われ、佳苗さんは無関係な丘本さんを殺すことになってしまった。自分の世間体のために周りを巻き込んでこんな事態を引き起こすなんて、何とも身勝手なことだね。もちろん、彼に完璧を求めた周りの人々にも、責任の一端はあるんだろうけど……」

明瀬はそう言うのと、前に置かれたお茶を口に運んだ。すると、鳩村が思い出したように、

「待って、じゃあ、木柵はどうして間違つた推理を披露したの？ 性格は最低だけど、推理に関して彼は一流よ。この事件の真相にも気づいていたはずだよ」

「……そうだろうね」と明瀬。

「そうだろうねって、それじゃあどうして、木柵はわざと誤つた推理をしたのよ」

「……うん。これは根拠のない想像なんだけどね。木柵は鳩村さんが警二君に呼ばれて二階に上がった後で、佳苗さんのいる和室に行つたんじゃないかな。そこで、今の推理を——つまり、啓一君が他殺ではなく事故で、ダイイングメッセージを残したのは自身の死を他殺に装うためだったということ、話したのではないかと思うんだ。佳苗さんは相当なショックを受けたはずだ。警察が出てきて殺人事件の捜査で躍起になつて犯人を捜そうとしているというのに、それがすべて、孫の自分勝手のせいだと言われたんだからね。そして、こうも思つたはずだ。現状が、孫のわがままで引き起こされた事態であることは隠しておきたい、とね。誰だつて、身内の恥は晒したくないだろう。ましてや、かわいい孫のことだ。そう考えてもおかしくはない。そこで、木柵は彼女にある提案をしたんじゃないだろうか。すなわち——」明瀬は一呼吸おいてから続けた。「丘本さんを殺して、啓一君殺しの犯人に仕立て上げようという提案だ」

「そ、そんな……」永緑は驚いて、言葉が続かないようだった。

鳩村は、悩ましそうに額に手をあてて、

「なるほどね……。それで、あんなでたらめを……」

と言ったが、何か疑問に思ったことがあったようで、顔を上げた。「……でも、木柵はどうしてそんなことをしたのかしら。彼に利益がないように思えるんだけど」

「うん。これもまた想像なんだけど、木柵はその提案をした後、丘本さんを犯人に仕立て上げることに協力する代わりに、対価を求めたんじゃないかと思うんだ」

「対価というのは何なんですか？」と永緑が訊く。

「骨董品だよ。佳苗さんの亡き夫が集めていたという、骨董品の中に、おそらく彼は、欲しいものを見つけたんだと思う。それをもらう代わりに、彼は佳苗さんと手を組んだんだ」

明瀬はそこで一つため息をついて、「まあ、これは全部推測だからね。木柵という探偵が本当にそんな事をしたかはわからない。」

それと、一応、釘をさしておくよ。本当はこんなこと、言いたくないんだけど……。もし、啓一君が事故死だったという解釈を警察に話したら、佳苗さんが人を殺してまで隠そうとした秘密を暴いてしまうことになる。このままにしておいた方がいいというわけではないけど、もし話すなら、そのことを考慮したうえで話してほしい」

探偵が話を終わると、その場に沈黙が降りた。

明瀬は、自身の解釈を話し終えてなお、事件について考えていた。推理披露をしたものの、彼の中にはまだ疑問点があったからだ。それは、佳苗はどうして丘本東助を殺したのかということだった。

確かに、啓一の身勝手な行動で周りに迷惑がかかっているのだと話されれば、そのことは隠しておきたいと思っただろう。しかし、だからといって、殺人を犯すだろうか。それでは結局、一家を殺人犯の家族にしてしまうことになる。どうして佳苗さんは、丘本東助を殺したのだろう。

……行き詰まったときは、前提を疑ってみるのも一つの方法だ。自分が無意識のうちにそうだと思いついていた部分はないだろうか

……。

木柵という探偵は、本当に啓一君が事故死だと佳苗さんに話したのだろうか？ 例えば、木柵が鳩村さんたちの前で披露した推理——つまり、丘本東助が啓一殺しの犯人だという推理を、佳苗さんに話したのではないか。だとすれば、孫を殺された復讐に、彼を殺すというのわかる。

……しかし、木柵の方からすれば、その状況はあまりよろしくないだろう。なぜなら、佳苗さんには隠すべき秘密がないので、木柵に丘本が犯人だと教えてもらったこと、そして、教えてもらった代わりに、対価を渡したことを黙っておく必要がないからだ。

木柵が口止めをしたため黙っているということも考えられるが、それは木柵の方が佳苗さんを信用できないだろう。木柵はおそらく、もっと安全な策を講じたはずだ。

そう、例えば……。

明瀬はそこで、ふと思いついたことがあった。『ダイイングメッセージを残す行為そのものの理由に関する分類』に第五の解釈を追加してもいいかもしれない。すなわち——

⑤ 犯行現場を誤認させるため

——これだ。

穴も多いが、ある程度は人を納得させる意外性のある解釈なのではないだろうか。もしかすると木柵はこの解釈を佳苗に喋ったのではないか。そして佳苗は、秘密を守るために木柵と取り引きをし、丘本東助を殺したのではないか……。

彼の思い付きは徐々に形を成し、確信を作りあげていった。

磐二に連れられて鳩村が二階に上がった後、木柵は和室に向かっ

た。依田佳苗に会うためだ。

和室に入って初めに目についたのは、一つの壺。かなりの価値があるものだと彼にはすぐにわかった。

手に入れよう。

木埜はそう決めていた。彼は、部屋の中央でこちらに背を向けて座っている猫背の老人に、いきなり声をかけた。

「依田佳苗さん。あなたは、この事件の犯人は誰だと思っ？」

彼女は少し驚いたように振り向く。木埜は、佳苗が言葉を発する前に続けた。

「私は、磔二君が犯人だと考えているんだ。まあ、黙って聞きなさい」

真つ赤な嘘だ。しかし、ある程度説得力のある嘘をつこうとしていた。

「この事件の関係者の中で動機があるのは磔二君だけだろうか？」

佳苗が反論しようとしたが、木埜はそれさえも遮って、

「あなたの言い分もわかるが、客観的に見て、この事件の関係者のうち、比較的動機らしきものを持っている、唯一の人物は磔二君だ。認めていただかなくても結構。故意にせよ、半分事故のようなものだったにせよ、啓一君を殺したのは磔二君に違いない。

あなたの次の言葉は待たなくてもわかる。磔二君にはアリバイがあると言いたいのだろうか？ ああ、そうだ。彼にはアリバイがある。ただし、啓一君が自室で死んだのだとすれば、だがね。

死亡推定時刻の九時から十時の間に啓一君は死んでいる。そして、磔二君は、九時から十時の間、家に帰ってきていない。これらは純然たる事実だ。一見、これだけでアリバイが成立しているかのように見えるが、それは愚昧な先入観の産物だ。啓一君がこの家で死んだと考えなければ、これはアリバイでも何でもないのでよ。

啓一君が殺されたのはこの家ではない。啓一君は別の場所で死んで、ここに運ばれてきたのだ。

順を追って説明しよう。啓一君が丘本東助と顔を合わせていない

ということ、裏を返せば、彼はこつそり家を抜け出すことが可能だったということだ。休憩に散歩でもしていたのかも知れないが、実は啓一君は、磔二君と同様に家の外に出ていたのだよ。そして、啓一君はそこで死んだ。磔二君が殺したのか、事故のようなものだったのかは知らない。とにかく、彼は後頭部を強く打つことがあつて亡くなったのだ。そしてそこに、磔二君もいた。

磔二君のその後の行動を考えると、やはり、磔二君に責任の一端はあつたのだろう。磔二君は、死体を家に運ぶことにしたんだ。

死体を運ぶ途中、磔二君は不良に絡まれる鳩村という女を目撃した。磔二君はひとまず死体を置いて、不良と女が早く立ち去つてくれないかと考えて見ていたのだが、運悪くその女と目があつてしまった。ここで磔二君は機転を利かせる。その不良たちを追い払つて、目撃証言を作っておくことにしたんだ。アリバイ作りのためにね。

その後、家に戻ってきた磔二君は、こつそりと啓一君の部屋に向かい、さもそこで死んだかのように啓一君の死体を演出した。脚立を倒し、参考書やノートを床にまき散らした。ただし、極力音を立てないように、だ。そして、磔二君はあえて、自分を指し示す『ハンニ』というメッセージを残した。

ここが磔二君の賢いところだ。『ハンニ』というメッセージを、被害者が残したものだ、と読み取れば、その時点で犯行現場はそこであるという先入観が生まれる。すると、磔二君にはアリバイができる。

かといつて、『ハンニ』というメッセージが、磔二君を疑わせようと犯人が残したものだ、と解釈すれば、その時点ですでに、磔二君は容疑者から外れているのだ」

木埜は得意げにでつちあげの推理を語った。

佳苗は口を開け、しわだらけの顔を絶望に染めて木埜を見上げて

いる。そこで木埜はにやりと笑った。そして、彼女に迫ると、決定的な一言を放った。

「どうだ。取引をしないか？」